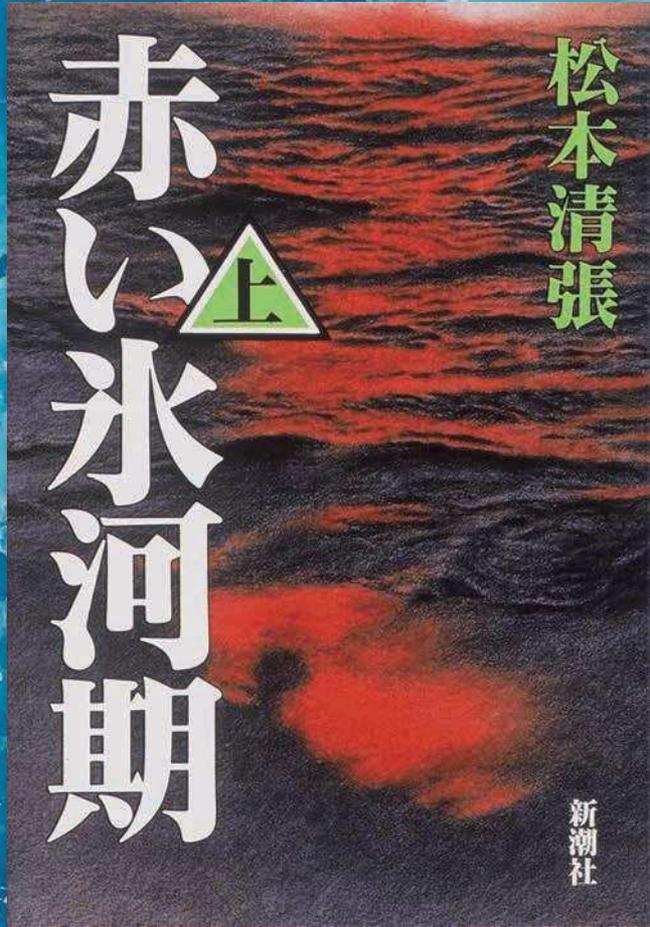


# 松本清張記念館

◆館報◆  
2019.8  
第61号

だが、個々の殺人事件などはとるにたりない。  
エイズ・ウイルスは大量殺人を行なっているのだ。  
その量は戦争に次いでいる。



『赤い氷河期』平成元(1989)年 新潮社

『赤い氷河期』は、昭和63(1988)年1月7日~平成元(1989)年3月9日  
『週刊新潮』に掲載された。原題「赤い氷河——ゴモラに死を」。

現在入手しやすい本

『赤い氷河期』新潮文庫、松本清張全集63巻

## 目次

松本清張研究会第40回研究発表会	2
松本清張研究奨励事業	4
「E・A・ポーと松本清張」	5
「清張映画ポスター展」	6
点描 作品の舞台を訪ねて	6
友の会活動報告	7
トビックス	8

## 作品紹介

ドイツ・バイエルン州ミュンヘンの南にあるシュタルンベルク湖で、首のない死体が見つかった。発見したのは、日本の国会議員で構成する視察団の一人だった。一行は、森鷗外訳「うたかたの記」でルートヴィヒ2世の最期を読んだところであった。

I・H・C(国際健康管理委員会)は、ヨーロッパ各国から醸金された「エイズ研究基金」によってスイス・チューリッヒに設立された、いわばヨーロッパのエイズ防衛共同体である。I・H・Cの調査課長である山上爾葉は、エイズが猖獗を極める世界の最前線に働いている。

名刺に「アイデア販売業」を謳う福光福太郎は、同時に田代明路という名で「ヒント・コンサルタント」業を営み、パリ本社以外にロンドン・ニューヨーク・デュッセルドルフに支局を持つ。福光から、血液製剤によるエイズウイルス感染の可能性と、事件との関連を知らされた山上はそのことをハンゲマン局長に報告する。エイズ拡大の課題に立ち向かう二人の歯車は、福光を交えあらゆる方向へと狂っていく。

本作品は、昭和から平成の変わり目である一九八八、一九八九年に発表された、近未来小説である。当時からすれば未知の「二十一世紀に入った二〇〇五年のこと」として清張が描いた、エイズによる大量死に瀕した世界だった。厚生労働省のデータによると、現在においては、感染者・エイズ患者の報告数は横ばいで推移しており、抗HIV治療も進み、差別をなくす活動が叫ばれている。本作は同性愛者や感染者に対する人権意識の点において現在とは隔たりがあるものの、晩年の清張が挑んだ意欲作であることは間違いない。E・A・ポー「赤き死の仮面」をふまえている点も興味深い。

(学芸員 柳原暁子)

# 松本清張研究会 第40回研究発表会

令和元年6月8日(土)午後2時  
松本清張記念館 地階 企画展示室

## ●講演 「清張文学の土壌

## — 地方・人 —



〈講師〉九州大学大学院教授

松本 常彦

### 清張が描く地方の肖像

このことは清張作品にも通ずる気がしますが、なぜなら、清張が作品で描いた紙上の旅や舞台設定にも、地方の肖像が映し出されているからです。

たとえば、昭和32年から33年にかけて連載された「点と線」は、ご存じの通り、遠く離れた北海道と九州を結ぶトリックが事件のカギとなる作品です。現代の私たちの感覚では、飛行機を利用するという発想が当たり前になつてしまっています。しかし先に述べたとおり、当時の人々には、北海道へ渡るのは海路で「という印象が、数年前の天皇の北海道訪問やその直後の洞爺丸事故によつて植え付けられていた可能性が高いのではないのでしょうか。つまり清張は、当時の読者にとつて北海道や九州がどういう場所かという大衆化された認識をうまく利用して、トリックを組み立てたとと言えるでしょう。

清張作品には、日本の社会や歴史の中で育まれた、それぞれの地方や地域の特徴が、時代性とともに描かれています。松本清張は、自らも地方人であり、地方と地方人を描くことから出発し、それを創作上の戦略とした作家です。

### 小説の舞台としての地方

清張が昭和28年に「或る『小倉日記』伝」で芥川賞を受賞した直後、当時の小説の大半が東京を舞台にしていると指摘した文芸時評があります。それに対し、清張は小倉で、小倉の物語を書いたのです。上京以降の作品についても、そのほとんどが地方を舞台にしているといつても過言ではないと思います。松本清張記念館の企画展の図録に、作品の舞台を示した日本地図がありますが、ほぼすべての都道府県に印がついています。

一貫して地方を描き続けた清張には、自身が地方出身者だからという理由ではなく、小説を通して地方色を描き、そうした地方色や地方の事情を事件全体の構造と関連させるといふ小説の戦略があったと考えられます。たとえば短編「凶器」は、佐賀県の農村を舞台に、若い未亡人が自分に言い寄ってきた男を固い餅で殺害する話ですが、穀倉地帯の産物である餅を凶器とするあたりは地方色からの発想があると言えるでしょう。さらに、農家の副業として藁を使った家内工業に携わる貧しい未亡人と、藁製品の仲買人として彼女を搾取る男との関係、つまり殺人事件に限れば加害者と被害者との力関係を通して、その地方の社会環境や社会構造など地方的な特色や性格を炙り出すのです。

### 天皇が巡った地方

先の改元に関連して新聞やテレビをはじめ各種メディアによる多くの報道がありました。平成の重大事件や流行歌など回顧トピックも多く、その中でも特に「天皇の地方訪問」に関する報道が目立ちました。

天皇の地方訪問は、昭和天皇による戦後の地方巡幸の流れを受け継いだ二面があります。戦後の地方巡幸では、昭和21年から26年にかけて天皇は未返還の沖縄などを除き、国内各地を訪れ、ご当地の北九州にも昭和24年のちよど今頃の時季に訪れています。ただ、この二連の巡幸には北海道は含まれていませんでした。津軽海峡に戦時中の機雷の危険が残っていたからと言われます。北海道の巡

幸は、昭和29年8月に連絡船洞爺丸で渡った際に実現することになるのですが、洞爺丸は翌9月に台風で沈没し、日本の海難史上でも最も知られた事件になります。

ところで、平成の天皇の地方訪問には、「市井の人々や社会の片隅におかれた人々を訪ねて回る」というイメージが一般的にも定着していると思います。天皇は各地で行幸行事に出席するだけでなく、それに付随して「地方事情ご視察」、つまりその地域の福祉施設を慰問したり、最先端あるいは伝統的な産業、そしてスポーツや歴史など文化関係の場所を訪問したりします。その訪問先を見ると、その地方がどんなところかを端的に示す、いわば「地方の肖像」が浮かび上がってきます。

雑誌『旅』に連載された「点と線」の第2回には、香椎潟の死体発見現場で刑事と発見者が会話する場面があり、そこでは博多方言が使われています。ところが連載第4回の香椎市街地での聞き込みの場面では、博多方言を使うはずの地元住民の発言が標準語で記されています。こうした違いは、物語や場面の文脈や背景から、方言の使用を意図的に使いつけているのだと考えられます。

第2回では香椎の歴史や風土について地方豊かな説明があり、その流れの延長上で、登場人物たちの会話として地域性の証である方言や訛りが効果的に用いられているのです。読者は、あたかも観光ガイドを読むように物語の舞台である香椎に引き込まれていき、寂しい海岸の情景が目につかんでくる仕組みになっているわけです。



「菊枕」や「断碑」、そして「父系の指」といった作品においても、同一人物の発言にもかかわらず、場面によって方言と標準語を使い分け、同郷の出身者でも境遇に応じて話し言葉に差異がある例などが見られます。これらは登場人物のキャラクターに潜在する地方性や、話者と周囲の人物との微妙な距離感や関係性を示す手段として、方言を意識的に活用しているのだと考えられます。清張が小説で用いる方言は、地方色の演出にとどまらず、高度成長期の上京者の多くがそうであるように、方言を使う地方人と社会生活に順応し共通語を使う都市生活者といった、二人の間の中にある重層性までも描き出しています。

### 地方の風景描写

幕末の佐賀鍋島藩が舞台の「歌々吟」には、水面が輝く堀に浮かべた大きなタライに乗って菱の実を採る若い女性の姿を美しく描いた場面があります。これも佐賀ならではの水郷風景であり、地方色の演出の一種と考えられます。雑誌『旅』に寄稿したエッセイには、清張自身が実際に佐賀でこうした光景にふれた体験も述べられています。

ところで雑誌『旅』の表紙には、地方の山や海で働く美人の娘を撮った写真がよく使われています。被写体の女性は、おそらく地元農家などの娘さんではなく、撮影用のモデルだと考えられます。つまり、景色は実景で

すが、地方色が演出されています。

この地方の労働の現場であるような場所に美人を立たせるといふ表紙写真の構図は、「歌々吟」で清張が描いた光景と非常によく似ています。それらはいずれも、有名な観光地ではなく、人々があまり訪れない鄙びた場所を背景に、そこで働く者の美しさを表現したものだと言えます。先述のエッセイで清張は、「このような水郷が世間にはほとんど知られてないことを嘆き、風景にも運・不運があると指摘しています。

清張が作中で地方を描く際、中央にはあまり知られていない「不運な風景」に光を当て、その魅力を伝える描き方をしています。こうした眼差しは、新聞社で広告意匠を担っていた清張の経歴によっても養われたでしょう。そこで培われたのは、多種多様な広告の対象について、種々の構図やデザインを通して、その魅力を伝える技術でしょうが、そうした技術は、小説家になった後も見事に活用されていると考えられます。

### 地方と中央という構造

清張の作品には、地方を描くことによって、たとえ具体的に中央について詳しく書かれていなくとも、「地方と中央」という構造が浮き彫りになるといふ特徴があります。

デビュー作「西郷札」は、宮崎の士族の家に生まれ、維新後は東京で車夫となった男が主人公の小説です。彼の義妹は東京で明治政

府の官僚の妻になりますが、その官僚の策略

によって主人公は宮崎の地で破滅させられます。この物語の背景にあるのは西南戦争ですが、この戦争にも不平不満を抱く地方士族を中央政府が鎮圧するという性格がありました。

つまり地方と中央のそれぞれを象徴する登場人物たちを通して、その対立構造、そして「中央に滅ぼされていく地方」が幾重にも描き出されているのです。以降の多くの作品からも、繰り返しこの構造を読み取ることができると思います。

### おわりに

ここまでみてきた通り、特に初期の清張作品には、地方の「敗れ去る人々」や「消えていく風景」が多く描かれています。それらの作品が書かれた時代は、ちょうど高度経済成長の進展に伴って日本から地方性や郷土色が急速に失われていった時期と重なっています。ただし、消えていく時期であるからこそ、テレビなどのメディアは報道コンテンツとして注目した二面もあつたわけです。地方とその問題にスポットを当てた清張の眼差しは、そうしたメディアとも呼応しながら、地方の行く末を見ていたような気がしてなりません。現在の地方は、当時よりもさらに複雑かつ深刻な状況を抱えています。盛んに地方創生が叫ばれています。私たちがどのような「地方」を目指して創っていけばよいでしょうか。



● 研究発表

「下関での〈清張〉と清張の〈下関〉」

松本清張の地理的理解(二)

〈発表者〉松本清張研究会 中川 里志

要旨

清張は幼少期の数年間を、両親や祖父母とともに下関で暮らした。「半生の記」や「骨壺の風景」等の自伝的作品を慎重に比較し、古地図も参考にして読み解くことで、まず清張の生活空間としての「下関」を浮き彫りにする。旧壇之浦で餅屋を開く祖父母を頼り、松本家は小倉から下関に移った。清張歳。夜に対岸の「門司の灯が小さな珠をつないだように燦く」のを、海にはみ出た家から眺め、「壇之浦の時代は、私にとって幼いころの『詩』であった」と書く記述は興味深い。さらに「もし、少年に「未知への憧れ」があるとしたら、私その思慕は(中略)門司の夜景からはじまったのかもしれない」との言葉も見逃せない。

下関が舞台の「骨壺の風景」や「恩誼の紐」では、祖母カネとの血縁以上に固い「絆」がテーマである。火ノ山の崖崩れを機に田中町に移る。家は父親の遊郭通いで「地獄のよう」になり、祖母は女中として他家に住込む。実験であろう。祖母の奉公先(外国航路の船長宅)を訪ねての外泊は「恩誼の紐」の、祖母の葬儀で大声で泣いたことは「骨壺の風景」の、作品の不可欠の背景である。特に作品理解の上で重要な

は、清張を溺愛した祖母がよく言っていた「まぶって(守って)やるけんのお」という深い響きを持つ言葉である。

清張にとって「下関」ほどのような街であったか。国際港門司の夜景から始まった清張少年の「未知への憧れ」は、身近に船長や船員のいる、海峡の街下関で、朝鮮半島・大陸へと繋がる関釜連絡船や遠洋漁業のトロール船団を日常的に眼にすることで、世界の海や町々への具体的な想像へと育ち、清張に「世界への広い視野」「世界的思考」の萌芽を植え付けたのではないか。また下関時代に、清張の心に深く刻まれたものは、「まぶってやるけんのお」という言葉に象徴される祖母の強い愛情であり、二人の強固な「絆」ではなかったか。祖母に強く「まぶられている」という「絆」の安心感と、祖母のその「恩誼」に報いねばならないという意味での、極めて日本的な庶民的正義感が、清張の貧苦の生活と成長を支えた。そして、作家清張は生涯その庶民的正義とペンを武器に世界と闘い続けたのである。

清張の人間形成における祖母の存在や、世界的視野・思考方法の獲得という面から、「下関」時代はもっと注目され研究されている。

第21回 松本清張研究奨励事業 入選企画決定

「松本清張研究奨励事業」は21回目を迎えました。選考委員会による厳正な審査の結果、2件の研究企画が入選しました。

松本清張文学のメディアミックスに関する基礎的研究

代表 志村 三代子  
(都留文科大学准教授)

松本清張におけるGHQ占領に関する表象と言説の総合研究

川崎 賢子  
(立教大学特任教授)

第22回 松本清張研究奨励事業募集

募集要項

- 対 象 ① 松本清張の作品や人物を研究する活動  
② 松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)  
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンルは問いません。ただし、未発表に限り、個人又は団体も可。
- 内 容 入選者(団体)に120万円を上限とする研究奨励金を支給します。
- 応募期限 令和2年3月31日
- ※詳しくは、ホームページをご覧ください。記念館までお問い合わせください。

# 清張生誕110年・ポース生誕210年記念

## 特別企画展

エドガー アラン

# E・A・ポーと松本清張

EDGAR ALLAN POE & SEICHO MATSUMOTO

2019年は、松本清張が生まれて110年、エドガー・アラン・ポーが生まれて210年にあたります。清張は、ポーが生を受けたちょうど100年後に、誕生したのです。

これを記念し、エドガー・アラン・ポーと松本清張についての企画展を開催します。

清張は、若いころからポーを愛読していました。ポーは推理小説の始祖と言われ、清張のみならず、日本はもちろん世界のミステリー界にとって重要な作家です。

この二人の作家の記念すべき節目の年に、清張作品に見えるポーの世界を紹介するとともに、両作家の直筆資料など、貴重な品々を展示いたします。

開催期間

令和元年11月15日(金)～令和2年3月1日(日)

開催場所

松本清張記念館 企画展示室



### 1.先覚者・エドガー・アラン・ポー

ポーの生涯、その比類ない文学的位置づけなど、貴重な直筆資料とともに紹介。

### 2.松本清張が出逢ったポー文学

日本におけるポー文学の受容を、清張との関連を中心に紹介。ポーが日本文学に与えた多大な影響について振り返る。

### 3.清張作品にみるポー

ポーに触れた清張の小説やエッセイの紹介、生原稿の複数点展示。清張が高等小学校時代に投稿したと思われる詩や、作家になって書いた詩について紹介する。

### 4.ミステリー史概観

ポーから始まる世界のミステリーの歴史を概観する。

### 5. Illustration (イラストレーション/挿絵の世界)

ハリー・クラーク、オーブリー・ピアズリーほか、ポー作品を豊かに支える挿絵とその魅力を紹介。

その他 笠井潔氏(ミステリー作家・評論家)による寄稿

観覧料：常設展観覧料に含む(一般600円[480円]、中高生360円[280円]、小学生240円[190円]) ※ [ ]は30人以上の団体

主催：「E・A・ポーと松本清張」展 実行委員会 後援：日本ポー学会

# 清張生誕110年記念ミニ展示 清張映画ポスター展

期 間／令和元年8月1日(木)～9月30日(月)

会 場／企画展示室

観覧料／無料(常設展示の観覧料は別途必要です)

協 力／北九州市立映画資料館 松永文庫

松本清張記念館では、この夏、清張生誕110年を記念して、ミニ展示「清張映画ポスター展」を開催します。

松本清張は約40年の作家生活を通し、約1000編もの作品を遺し、多くの読者に愛されました。1958年に「点と線」「眼の壁」がベストセラーになったことをきっかけに清張の推理小説・現代小説が広く親しまれたのは皆さんご存知のとおりです。

清張作品は映像化も非常に早く、1957年1月に「顔」が公開されたのが最初の映画化作品でした。人気作品が映像化されることで、読者の裾野を広げることとなりました。

現在までで清張の原作映画は36作品が制作・上映されています。昨年、当館の開館20周年記念事業で実施した「砂の器」シネマコンサートで満員の観客の涙を誘った記憶は新しいところですが、ほかにも多くの作品が現在も親しまれています。

今回の展示では、北九州市立映画資料館 松永文庫の協力を得て、数多くの清張原作映画のポスターが一堂に会します。映画の顔ともいえるポスターを通じて、多彩な清張映画の魅力に触れてください。

## 描 陸行水行 作品の舞台を訪ねて

「陸行水行」は1963年11月から翌年1月に「週刊文春」に連載された。邪馬台国の謎と独創的な説は、多くの読者を邪馬台国ブームに巻き込んだ。

物語は東京の某大学の歴史科の万年講師である川田修一が、宇佐神宮の研究のため大分県宇佐郡安心院町を訪れるところから始まる。川田は

「妻垣神社」という大変古い神社のご神体の石をカメラにおさめて二服しているとき、ある男と出会う。その男は浜中浩三と名乗り、愛媛県の村役場の書記で邪馬台国の所在を研究していた。

「妻垣」の名前は古風だ。例の古歌「妻ごめに八重垣つくる…」などが想起されよう。そんなことを思いながら、百姓家の前から山林の間を分け入って、胸を突くような急な坂を登った。石ころがごろごろして大そう登りにくい。樹が蔽い、茂って日光も射さないから、しばらくはトンネルのように薄暗かった。

(略)

ようやく坂を途中まで登ったところで、やや広い棚地に出た。そこには、粗末な木で囲った垣の中に古い石が一個ぼつんと置かれてあった。石は苔に蔽われて暗鬱な色を呈していた。

実は、これがこの神社の神体なのだ。こういうところからもこの神社の古さが分る。

(文藝春秋「松本清張全集7」より)

実際に共鑰山の山腹にある妻垣神社のご神体の石を訪ねてみた。

木や竹が茂っている山道は竹が風に揺れてしなり、上部がぶつかりあう音が響いていた。神社からこの急な山道を350mほど進んだところに玉垣に囲まれたご神体が鎮座しており、古事記や日本書紀に登場する「足一騰宮」の神話の舞台のひとつとなっている。

物語では、この史跡の場所が川田修一と浜中浩三は出会い名刺交換をする。そして、浜中の新たな着想をもった邪馬台国の所在の話が展開されていく。

(村上美智代)



(妻垣神社奥宮巨石)



(神社の眼下に広がる盆地)



(妻垣神社拝殿)

## 清張生誕110年記念事業への協力

清張生誕110年を記念して、県立神奈川近代文学館で、清張作品の世界とその時代を紹介する「特別展『巨星・松本清張』」(3月16日～5月12日)が開催され、15,000名を超える来場者が訪れました。当館からは藤井名誉館長の編集委員への就任とともに原稿や愛用品などの資料提供等の協力を行いました。

また AXNミステリーが清張生誕110年記念事業として開催したスカイプリーや記念館でのイベントに協力しました。



## ドラマ上映会を行いました

4月27日(土)～5月6日(月)の10日間、ゴールデンウィーク特別イベントとして「ドラマ上映会」を記念館の企画展示室で行いました。

過去にNHKから寄贈された14作品のうち、「事故」「天城越え」など5作品を上映し、延べ558名の皆様にご参加いただきました。上映作品には松本清張本人が特別出演していただきましたので、参加者の皆様は、ストーリーはもちろん、清張の演技にも注目して楽しまれていました。

## 講演に行ってきました

日付	主催者・会場等
5/7	北九州市立年長者研修大学校 周望学舎
6/7	北九州市立大学
6/18	北九州プロバスクラブ
7/16	一般社団法人 北九州銀行協会

## 友の会 活動報告

### 朗読劇「聞かなかった場所」

令和元年6月1日(土)参加者162名  
松本清張記念館・屋外特設スタンド

劇団前進座による朗読劇は、今年で16回目を迎え、春の恒例事業となっています。今年の演目は、「聞かなかった場所」でした。小倉城の石垣をバックに、中庭全体を舞台として使い、照明、音響、そして出演者の皆さんの、声だけとは思えない巧みな演技が一体となり、参加者からは、「緊迫感が強く出てよかった。」「ストーリー

が映像で観るよりもリアルに思い起こされ、いつまでも余韻にひたっていられます。」等の感想が寄せられました。



### 春の文学散歩

テーマ：「Dの複合」～東経135度線と丹後半島を巡る旅

令和元年5月14日(火)～15日(水)参加者29名

1日目 天橋立ビューランド→伊根の舟屋  
2日目 網野神社→橋本忍記念館(市川町文化センター)→日本のへそ記念碑→明石市立天文学館・柿本(人丸)神社

令和最初の春の文学散歩は、松本清張の小説「Dの複合」にちなみ、京都府京丹後市から兵庫県明石市までを、東経135度線に沿って南下する旅を企画しました。初日は、急に雨に降られるなど、あいにくの天候でしたが、日本三景の一つでもある天橋立と、同じくこの地区の代表的な観光地の一つである「伊根の舟屋」を訪れました。2日目は打って変わり汗ばむほどの陽気となり、その中、今回のテーマである東経135度線南下の旅に赴きました。京都府北部の京丹後市にある網野神社から、橋本忍記念館(兵庫県市川町)、「日本のへそ」兵庫県西脇市を経て明石市立天文学館と柿本神社まで行きました。「Dの複合」や清張ゆかりの、普通のツアーではまず訪れないような場所を中心に巡り、思い出深い文学散歩となりました。参加者の皆さんからは、「個人旅行ではとても行けない

旅。参加できてありがたい。」「日本の標準時、いつもここと一緒に過ごしているのだと嬉しかったです。」「多くの場所に仲間と行けて楽しかった。」といった声が寄せられました。



伊根の舟屋

橋本忍記念館



網野神社

経緯度の標柱

### 友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集

松本清張記念館友の会は8月1日～翌7月31日を一年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、「友の会だより」の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

友の会入会のお申込みは、  
松本清張記念館友の会事務局まで  
TEL.093-582-2761



中学生・高校生

## 読書感想文コンクール

中高生に松本清張の作品に親しんでもらうこと、清張の人と作品についての理解を深める機会を作ることを目的としています。新時代を切り開く若者達へ、探求の人・松本清張の精神を伝えることができれば幸いです。

- 応募対象** 全国の中学生・高校生  
 ■**課題図書** (中学生・高校生ともに下記から1作品)

## 「眼の壁」

(『眼の壁』新潮文庫)

## 「陸行水行」

(『陸行水行』文春文庫)

## 「或る『小倉日記』伝」

(『或る『小倉日記』伝』新潮文庫、角川文庫)

■**応募方法**

- 中学生、高校生ともに1200～2000字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。
- 手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし、全体の字数がわかるように応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。
- 原稿は自作で未発表のものに限ります。なお応募原稿はお返しいたしませんので、必要な人はコピーをおとりください。

■**応募締切** 令和元年9月30日(月) ※当日消印有効

- 応募先** 〒803-0813 北九州市小倉北区城内2番3号  
 松本清張記念館 読書感想文コンクール係  
 ※応募用紙は記念館HPからダウンロードできます。

- 選考表**  
 松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

最優秀賞、優秀賞の受賞者には、11月中旬頃、本人と学校に通知し後日表彰式を行います。なお、入選の結果は、当館発行の「館報」で発表します。その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

- 賞** (受賞人数等変更の場合もあります)

- 最優秀賞(1名)
- 優秀賞(中学の部…1名)(高校の部…1名)
- 佳作(中学の部…3名)(高校の部…3名)

※なお、最優秀賞は中学の部、高校の部で各1回ずつの受賞と限らせていただきます。最優秀賞受賞後の応募も歓迎します。すでに受賞した人からの応募作品が賞に該当する場合は〈特別賞〉として当館発行の「館報」掲載を予定しています。

- 後援** 西日本新聞社

- 協力** モンブランジャパン

応募先  
問い合わせ

〒803-0813 北九州市小倉北区城内2番3号 松本清張記念館 読書感想文コンクール係

TEL 093-582-2761 FAX 093-562-2303

## ミュージアムショップの新グッズ紹介

記念館・地階ミュージアムショップには、清張の本や当館発行の研究誌・図録はもちろんのこと、オリジナルグッズも販売しています。

今回は新たに取り扱いを始めた書籍とグッズをご紹介します。

ご来館の際は、ぜひ、ミュージアムショップをのぞいてみてください。

- ① 松本清張生誕110年記念 みうらじゅんの松本清張ファンブック 清張地獄八景(文藝春秋) 1,080円(税込み)
- ② しおり 250円(税込み)
- ③ ポストカード モリナガ・ヨウの探訪 松本清張記念館 1枚200円(税込み) ポストカード2種とレーベのセット 500円(税込み)

●**編集後記**●

8月を迎えました。記念館の周りでは朝早

くから、たくさんの蝉が鳴いています。

毎年、夏に開館記念講演会を実施していますが、今年は8月4日に作家の柚月裕子氏をお迎えし、「小説がなくならないわけ」をテーマにお話をさせていただきます。内容は次回の館報でお届けします。

また、今回の館報でもお知らせしていますが、清張生誕110年を記念して、8月1日から「清張映画ポスター展」、11月15日から「E・A・ポーと松本清張」展を開催します。どうぞ、記念館に足をお運びいただき、清張作品の魅力に触れてみてください。

(M.M)



イラスト:山藤 章二

編集・発行

## 松本清張記念館

〒803-0813  
 北九州市小倉北区城内2番3号  
 TEL 093(582)2761  
 FAX 093(562)2303  
<http://www.kid.ne.jp/seicho>  
 制作 (株)コムディア

- 開館時間** 午前9:30～午後6:00(入館は午後5:30まで)
- 休館日** 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料** 一般/600円(480円) 中・高生/360円(280円)  
 小学生/240円(190円) ( )は30人以上の団体
- アクセス** JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分  
 小倉からはバスをご利用いただく便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)  
 車: 北九州市高速、大手町ランプより5分

